



POPULAR BOOKS



昭和40年12月25日 発行

著作者 高木 彬 光

出 獄

発行者 矢 貴 東 司

印刷者 北 山 茂

発行所 株式会社 桃 源 社

¥270.

東京都中央区日本橋蛸薬町1-12

電話 (671) 4001~2 番

振替 東京 64351 番

落丁・乱丁の節はお取替え致します

1965 ©

出 獄

高木彬光

〈神津恭介推理ノート〉



桃 源 社

〈ポピュラー・ブックス〉

目次

第一話	邪教の神	七
第二話	ヴィナスの棺	三
第三話	出獄	七
第四話	天誅	一五
第五話	原子病患者	一五
第六話	恐しき馬鹿	二八
第七話	鼠の贅	三三

装幀 三井永一

出

獄

第一話 邪教の神

一

どうして、この奇怪な邪教の像が、自分の手に入ったのか、村上清彦はよくおぼえてはいなかった。たしかどこかの古道具屋で見つけて来たのには違いないが、それがどこかはどうしても思い出せなかった。

その夜はひどく酔っていたのだ。意識がなくなるほど酔うと、彼は所きらわず、夜の街をどこでも歩きつづける奇癖がある。

前後の記憶は全くなく、ただその古道具屋の光景だけが、まるで悪夢のようにおぞましく、彼の頭に鮮烈な印象を刻みこんでいた。

小さな、汚い店だった。裸電球に照らされた店先には、幾歳か、男か女かも知れない老人が、眼をしょぼしょぼさせながらちよこんと坐っていた。赤茶けた光が、その皺だらけの顔に深い陰影を刻みこんで、まるで何かの動物が着物を着てかしこまっているようだった。そしてこの木像は、埃だらけになってその隣りに立っていたのである。

くわしくはしらべもなかったが、この像はふしぎな魅力で彼の心をひきつけてしまった。恐ら

く、どこかの土人の作った人形だろう。素朴な稚拙な、土臭い原始芸術——土俗作品と考えて、五千円でいい値通りに買いつたおぼえはある……

その翌朝、ちゃんと自宅で眼をさまし、そしてこの木像が、枕もとにあったところを見ると、これを買ってから、その近くで流しの自動車を呼びとめ、家まで帰って来たのだろう。すこぶるたよらない話だが、酒のみの行動というものは、たいていそんなものである。

だが、朝の明るい光の中で、この像をながめた時には、彼は何ともいえぬ奇妙な感じにおそわれた。恐怖とも不安とも驚愕とも、何とも名づけようのない、複雑微妙な感覚が、彼の背筋をかすめたのだ。

その像は、高さ一尺五寸ぐらい、黒い堅木かたぎに刻まれていた。男か女か、その性別もはっきりしない裸体の、腰のあたりに、何か薄物をまとったような姿だが、その黒い石をはめこんだ両眼には、何ともいえない邪悪な意図が満ち満ちているように思われた。髪の毛のまわりに、まるで王冠か何かのように、まるい珠がいくつもならんでいた。手の指は、両方とも七本ずつ……

金と暇に任せて、珍奇なげてもものばかり蒐集している彼のことだったから、一旦は気味わるく思ったものの、べつに手ばなそうという気はおきさなかった。ガラスのケースを作らせて、一応その中におさめると、いろいろとこの人形の起源をしらべにかかったが、彼一人の研究では、どうにも調べきれなかった。

清彦が友人の美術研究家、犬山直樹のことを思いついたのは、この像を手に入れて、二週間ほど後のことである。手紙を出すと、直樹はすぐに訪ねて来たが、この木像を一眼見ると、ひくい叫びを口からもらし、そのまま石になったように立ちすくんでしまった。

「これはいったい何だろう？　どこかの原始民族の作品だと思うが、どこのものか、どれだけの値打のものか、君には見当がつかないかね？」

「とんだだけものを掘り出したな。いったいどこで手に入れた？」

「それが、どこともわからないんでね……」

清彦が頭をおさえながら、この木像の舞いこんで来た由来を話すと、直樹もうんうんと相槌をうちながら、その話に聞きいつていた。

「妙なことだね……僕は運命論者じゃないが、まるでこの邪神の像が君を呼びよせ、この家へのりこんで来たとしか思えないな」

「邪神の像？」

「そうだ。僕にも由来はわからないが、原始芸術を研究しているうちには、その一般に共通な特長というものはわかってくるよ。原始民族の風習なり宗教なりについても、僕は一応研究したつもりだが、彼等の宗教はすべて多神教だから、たとえば太陽の神、月の神、山や川の神、あるいは死の神、病の神、善神もあれば悪神もある。悪神というより悪魔といった方がいいかも知れないが、要するに、人間の力で動かすことの出来ない超自然的な存在を仮定して、それに善悪の区別をつけるということだね」

「なるほど、それで邪神と断ずる根拠は？」

「顔の表情、指の数、そして頭をとりまいている眼の数……いろいろ特長を総合して見ると、そんな判断しか下せない」

直樹は清彦の眼を見つめ、真剣な調子で、

「君、これを四、五日、僕に貸してくれないか。ちょっと調べて見たいんだが」
ふだんの清彦なら、一も二もなくうんといったに違いないが、もともと天邪鬼あまのじやくな彼は邪神といわれると、かえってこの像を手もとからはなしたくない氣になった。

「せっかくだけれど、僕は自分でも、もう一度こいつを調べ直して見たいし……」

「もつともだ。しかし、僕もこういうものをこのままにしておきたくないし、せめて写真だけでもとらせてくれないか」

何といっても、こっちから来てもらったのだし、そこまでいやとはいえなかった。直樹は肌身はなさず持ち歩いている愛機のキャノンで、この像を八方から撮影すると、緊張しきった顔色で帰って行った。

二

この邪神の像の正体は、それから四、五日後に判明した。

前田譲治という人物が、直樹の紹介状を持って清彦の家を訪ねて来たのだ。もちろん、何の警戒もなく、清彦は客間へ出て行ったが、相手の顔を一目見たときには、はっとした。あの木像を最初にじっくり見つめたときのような奇妙な感じがふたたび、全身に襲いかかって来たのである。

前田譲治は、清彦と同じぐらいの三十五、六の年配だった。その服装はきちんと整ってはいたが、どこか異国の香いがした。その顔も理知的には違いなかったが、どこか憑かれたような感じがあった。その眼に宿る、偏執狂的な光は、あの木像の眼に満ちた邪悪な色を思わせた。

初対面の挨拶を終ると、譲治はすぐに切り出した。

「実は犬山さんにうかがって参りましたが、最近あなたは、奇妙な木彫の神像を御入手なさったようですね。それを拝見させていただくわけにはまいりますまいか？」

その日本語は文法的には正しかったが、発音とアクセントの具合に、何となくたどたどしいところがあった。

「せっかくおいで願ったのですから、もちろんお目にかけますが、あなたは一応写真で御覧になったでしょう？ あれを、どんな由来のものだと御鑑定なすったのです？」

「チュールルの神だと思います」

「チュールル？」

「御存じありませんか。それでは、簡単に御説明いたしましょう。私は米国生れ、いわゆる二世で、むこうのコロンビア大学で美術史を専攻しました。もちろん、原始芸術にも興味をもっているのですが、古い伝説を調べていると、こういう話にぶつかるのです。いまのいわゆる大洋洲、濠洲の北の海はむかし一大大陸だったというのです。それが地殻の変動で、たちまち大海の底に沈んだ。その高山の頂上だけが、海面の上にかすかに残ったのがいまの南洋群島だということです」

「いったい、いつごろの話ですか？ それは？」

「さあ、何万年前のことですかねえ……とにかく、その大陸には、大変な文化が発達していた。現在の人類に勝るとも劣らない文明を持った人類が棲息していたと信じられているのですが、何といっても、大陸がたちまち海となるような地殻の大変動だったから、そこにいた人類も、そのほかの各地に住んでいた人類もほとんど死にたえて——人類はふたたび野蠻時代から、ふり出しにもどって、進化の過程をたどり直したといわれるのです」

「それには証拠があるのですか？ 科学的な証拠が？ たとえば、マンモスの骨がどこかで発見されて、地球上には何万年か前に、こんな巨大な動物が棲息していたのだと、われわれでもうなずくような証拠が？」

「あいにく、そんな科学的な証拠は、まだ一つも見つかってはいません。ただ、この世には、われわれの常識や科学では理解出来ない現象がいくつもいくつも存在するのです。この大陸で、信仰されていた、チュールーの神々もその一つです」

清彦は、このあたりでいい加減、相手の精神状態を疑いかけた。氣違いにさからって、乱暴でもされてはいやだと思つて、時々うんうんと相槌をうつきり、相手の意のままに話しつづけさせた。

二時間あまりの大熱弁——清彦には、全くわけがわからなかった。ただ、おぼろげながら、理解出来たことは、欧米諸国には、この海底の大陸の存在を信ずる人々が、かなり多勢存在し、そのチュールーの神を信ずる秘密の宗教が、いまもなお、続いているということだった。

「それで、あなたも、そのチュールーとかいう神様の信者というわけですね？」

いつ終るとも知れない長広舌を、清彦はいい加減切りあげようと思つた。

「そうです。チュールー神を信じたおかげで私も、奇妙な力をさずかりました。あなたがたの想像も及ばぬような力です」

「たとえば、どんな？」

「たとえば、私が人を殺そうと思つたとします……仮に、その相手が百里のむこうにいたとしても、このチュールーの神様に祈れば、眼に見えない殺人光線のようなものが、その間を飛んで……」

清彦は一分も早く、この会見を切りあげたくなくて来た。腕時計をにらんで、

「大変面白いお話で、もっとゆっくりくわしくおうかがいしたいのですが、あいにく、今日は約束がありまして、これから出かけなければなりませんので……」

と逃げを打った。相手はとたんに眼の色かえて、

「それでは、その像を見せてはいただけなのですか？」

「お見せしてもよろしいのですが、今日は時間ありませんし、それに、あの木像にしたところで、何万年か前に、太平洋の底に沈んだ大陸から伝わって来たというものではないのでしょうか」

「もちろん、そうではありませんが……恐らくあれは、われわれの宗徒が、シンガポールの秘神堂に飾って礼拝していた神像だと思います。それを今度の戦争で、日本軍に持ち去られて、私はその行方を探しに日本へやって来たのです」

「あなたはそうおっしゃるが、私はあの古道具屋から、金を出して買いつつたので……べつに、シンガポールから、私が掠奪して来たというわけではありませんし……」

「あなたに御迷惑はおかけしません。いくらでもよろしいから、私が買いつくしましょう。いったい、おいくらさしあげたらよろしい。百万、それとも二百万？」

普通の人間なら、眼をまるくして、ひっくりかえるところだろうが、何千万かの財産を持つ清彦には、この金額はそれほど大したものではなかった。まして、相手の精神状態に疑惑を感じていたのだから、なおのこと強腰になって、

「おことわりいたします。そんな貴重な品だったら、私も一生秘蔵しますから」

清彦は呼鈴をおして、妻の滋子を呼んだ。

「お客さまのお帰りだから、お送りして……」

前田譲治は、途端に満面に朱をそいだ。立上って一、二歩、清彦の方へ近づくと、

「チュールー神の呪い、汝にあれ！」

怒気をはらんだ声でつぶやくと、そのままくると身をひるがえして、大股に部屋を出て行った。

三

村上清彦が、無惨な屍体となって発見されたのは、その翌日のことだった。場所は青山の屋敷町の一角、時刻は十時すぎだったが、このあたりはこの時間になると人通りもごく少くなる。

屍体を発見したのは、その近くに住んでいる飯島敏男という人物だった。彼の言葉に従うと、渋谷ですつと飲んでいて、酔いぎまみに電車にものらずぶらぶら歩いて帰る途中、道ばたの塀のかけから、一人の男がとび出し、彼をつきとばすようにして、かけだして闇に消えたというのである。

旧市内の、屈指の住宅地といわれながら、このあたりは復興が遅々として進んでいない。大邸宅も出来たかわりに、戦争後十年を経過した今日でも、まだ爆撃の跡をとどめる廃墟はいきょは随所にあるのだが、この崩れた塀の中にも、ただ焼けおちた建物の土台しかないだけに、彼もこの男の行動を不審に思ったのだ。立ちどまって耳をすますと、かすかに人の呻き声のようなものが聞える。勇を鼓して、男の飛び出した塀の中へ入って見ると、草むらの中に、一人の男の体が横たわっているのが見えた。

「チュールー……チュールー……」

われを忘れて、彼がその男の体を抱きあげて、しつかりしろとはげましたとき、相手はかすかに、こんな言葉を口からもらして、そのまま息がたえたという……洋服を血だらけにしながら、飯島敏男は、すぐに近くの交番へかけこんで、このことを報告したのだった。さっそく、警視庁では捜査一課と鑑識課の精鋭が現場へ急行し、捜査を開始した。

死因は、数カ所の刺傷と、後頭部の打撲傷だった。恐らく、この近くで犯人に襲われて鈍器で頭部を一撃され、気を失ったところをこの空地にひきずりこまれ、鋭利な短剣で、止めを刺されたものと推定された。ただ、傷は、みな急所をはずれていたために、完全な即死というわけではなく、出血多量が直接の死因となったと考えられたのである。

紙入の中には、一万円ぐらいの現金が入っていた。腕の金時計もそのままだった。強盗のしわざとは考えられなかったのである。

紙入の中の名刺から、被害者の身元はすぐに判明した。さっそくかけつけて行つた夫人の滋子は、見るも無惨な夫の姿に、たちまち卒倒した始末だった……

最初はただの殺人事件だと考えていた捜査当局も、被害者の最後にもらした一言が、奇怪な伝説を背後に持つ、邪教の神の名前であることを知ってとたんに色をなした。そして、いよいよ不思議なことには、あの木像は、忽然と、村上家の土蔵の中から姿を消していたのである……

この屍体の法医解剖にあたつたのは、東大法医学科の助教授で、戦後の日本で屈指の名探偵といわれた神津恭介だった。

まだ三十六の若さだが、その解決した怪事件の数は既に数十を越えている。その中には、その絶